

14－15世紀モスクワの国家と教会

－府主教宮廷と大公宮廷との人的関係を中心に

宮 野 裕

On the Personal factors in the relationship between the Church and the Grand Princes of Moscow in the 14th and 15th Centuries.

Yutaka MIYANO

Summary

In this paper, the author argued that personal factors played the role of a cementing agent linking the Power of the Grand Prince of Moscow and the church in the 14th and 15th centuries. In particular, the author emphasized the following points:

- 1) the relationship between Metropolitan Alexie and Grand Prince Semen was strong.
- 2) the court of the Metropolitans and the family of the Metropolitan's boyare fulfilled the role of linking the two powers.

Keyword

Moscow, Church, Russia, Grand Prince, Metropolitan

はじめに

モスクワ大公国における国家・教会関係の緊密化はこれまでに様々な観点から検討されてきており、本稿の筆者も近年は特に法的観点からそれを行ってきたⁱ。その際、史料中（法史料も含め）に、国家・教会関係を支える具体的な個人が散見されⁱⁱ、彼らの検討が、つまり国家・教会との関係を支える人的要素についての検討が必要であると筆者は考えるに至った。そこで本稿では、主に、この関係が結ばれ始めたと思われる14世紀後半～15世紀初頭の時期について、人的関係に焦点を絞って国家・教会関係の緊密化を論じてみたい。その際、本稿ではとりわけ、「府主教宮廷」とそれを構成する人々が14～15世紀ロシアの聖俗権力の緊密化に果たした役割に注目したい。

モスクワの教権の中心である府主教座において、およそ14世紀後半以降の時期に、「宮廷」が形成されたことがC.B.ヴェセロフスキーや近年のA.B.クジミンらの研究により知られているⁱⁱⁱ。当時の若干の法文書から存在が確認されるこの府主教宮廷は、世俗の、つまり大公の宮廷を模した構造を取っており、その構成員はボヤーレ（貴族）、宮廷官、小貴族、財務官といった、やはり大公の宮廷と同じ位階名称^{iv}で呼称された。彼らは聖職者ではなくあくまで俗人であり、府主教座の官房や所領において俗人として実務に携わった。その他には、府主教宮廷の構成員には特定家門の出身者が多かったことも明らかにされてきている^v。本稿の筆者の見るところ、聖俗の特色を併せ持つこの府主教宮廷やその構成員は、国家・教会関係の緊密化を検討するための格好の材料である。

ところが、これまでの研究において府主教宮廷は、そうした観点から殆ど注目されてこなかった。その原因は、かつてのソ連史学が、大公権力と教会権力の関係性よりも、まずは「社会経済的基盤」（下部構造）に、つまり「宮廷」の土地所有そのものに関心を有したことに求められよう。だが、府主教宮廷に関わる諸史料のなかには、これに属する人々の「異動」や家族関係についての情報が含まれており、それに基づいて、ある程度ではあるが、モスクワ大公国における聖俗宮廷間の人的関係を考察することも出来るのである。こうして近年、クジミンが府主教宮廷の勤務人を含む勤務人全体についての再検討を行ったのだが、彼は、史的な根拠が脆弱なままでこの宮廷の成立時期を早くに見積もったり、また宮廷の定義についてこれまでの研究者と異なる形を想定していたりするなど、やや勇み足と思われる主張を展開しているように思われる。そこで本稿では、これまでの府主教宮廷の研究を再検討すると共に、その成果を利用しながら、当時の国家・教会関係の緊密化について、聖俗宮廷間の人的関係の基盤に焦点を絞って考察したい。

1 府主教フェオグノスト時代までの聖俗的人的関係

府主教フェオグノスト（在位1328-53年）以前の時代に、俗人が府主教の勤務人・補佐人として登場した事例は、史的に明らかになるだけでも幾例か知られる。しかし多くの先行研究では、彼らが「宮廷」を形成するようになるのは早くても次の府主教アレクシーの時代（1354～78年）の末であると考えられてきた^{vi}。そうした結論に異を唱え、70年代末に至る時期の事例をかき集め、これまでの研究者よりも早い時期における府主教宮廷（或いはその「原型」）の形成について論じたのがクジミンである。具体的な成立時期をクジミンは明示しないが、彼が13世紀後半の府主教キリル2世（在位1240年代後半～1283年）の時代に俗人の役人が府主教を補佐していたことから話を始めているところから察するに、クジミンはこの時期以降に府主教座宮廷の原型が形成されていたと考えているようである。以下で見てみよう。

①まず問題になるのが、13世紀後半の府主教キリル2世の奉公人で、アレクサンドル・ネフスキーの葬儀に際して主人に付き添った「エコノム」セヴァスチヤンである。クジミンはこのエコノムをビザンツの俗人役人イコノムからの類推で、府主教所領の経営を管理する者と考えている^{vii}。しかし彼が挙げる二つの年代記のうち、モスクワ集成では、セヴァスチヤンが葬儀の最後の段階で、キリルと別個に参列者に説教を述べており^{viii}、従ってこのセヴァスチヤンについては聖職者である可能性が高いように思われる。

②また、府主教マクシム（在位1283-1305年）の「補佐人たち Сановники」について、後代に書かれた『聖ピョートル伝』（ピョートルはマクシムを継いだ府主教）で言及される。マクシムの死後、ピョートルが府主教位を得るまでの合間に、一時的に修道院長ゲロンチーが府主教位を「篡奪し」、マクシムの「補佐人たちを奪った^{ix}」。クジミンは、この「補佐人」を府主教座の勤務人と見なした上で、更に古ルーシの事例に依拠して、「補佐人たち」が俗人である可能性を主張する^x。しかし、この事例については判断材料に欠けると言わざるを得ない^{xi}。彼らが「宮廷」を構成していたかどうか、そもそもこの時期に「宮廷」が存在したののかも明らかでないのである。そしてまた、そして最も重要なことであるが、彼らが大公権力と府主教権力をつなぐような立場であったと述べるための根拠がない。上述の『聖ピョートル伝』から考える限り、彼らは府主教官房の俗人勤務人以上のものではなかったと思われる。

ここで官房と別個の存在として想定される「宮廷」について、簡単に述べておきたい。筆者の考えでは、先行研究が指摘するように、「宮廷」は単なる文書行政や府主教行政を担う俗人官僚

群からなる組織ではない。後述のように、ボヤーレなどの位階を得て「宮廷」を形成する人々は軍務をこなし、またその対価として土地を得た（15世紀以降多くの例がある）。つまり、自らの所領を有し、そこでは領主である人々なのである。この点では府主教宮廷の構成員はまさに大公の宮廷の構成員とも同じである。従って、土地を持たない、「府主教座の家産官僚」のような人々が勤める府主教官房は、府主教宮廷とは異なるのである（前者から後者への継承関係は否定されないが）。その意味で、「宮廷」の成立は、軍務を果たして土地を持つ人びと（ボヤーレや宮廷官のような）の存在を指標とするのがよからう。

③さて、次にクジミンが注目するのは、1331年にノヴゴロドに派遣された府主教の「ボヤーレ」（クジミンはそう判断する）、「フォードルとセミョン」である。ノヴゴロドの大主教候補ヴァシーリーを叙任するために彼をヴォルィニに呼び出す目的で、フェオグノストは両者をノヴゴロドに派遣した^{xii}。本稿の筆者も、俗人名である彼らが府主教の勤務人であったと考えたい。しかし、実際に年代記を見ると、テキスト上で「フォードルとセミョン」は「フェドルコとセメンコ」という指小形で呼ばれている^{xiii}。ボヤーレや宮廷官のような宮廷における上位の人びとは、その名誉的立場上、一般的には「本人の名前と父称（父親の名を元に作られる名前）」で呼ばれることを考慮するならば、指小型で呼ばれるフェドルコとセメンコを、土地持ちの軍事勤務人とは考えにくい。

④次に府主教「ボヤーレ」（同じくクジミンがそう判断するだけで史料上はそう呼ばれない）が登場するのは1353年のことである。このとき、府主教フェオグノストの指示により、大公ボヤーレとともに、「府主教のボヤーレとして^{xiv}」、アルチェミー・コロビインとミハイロ・グレチン・シチェルバティがコンスタンティノープル総主教のもとに派遣された^{xv}。「この冬、12月6日の聖なる父ニコラの日に、いと清き府主教フェオグノストが自分の代官アレクセイをウラジーミルの主教に任じた。そして自分の死後について、アレクセイを自分の代わりとして府主教座に祝福した。そして自分の息子である大公セミョン、弟公イヴァンとアンドレイ、ボヤーレ、貴顕らと相談し、使節をツァレグラド〔コンスタンティノープルのこと---筆者注〕の総主教に送った。大公からはデメンチー・ダヴィドヴィチとユーリー・ヴォロビエフが、府主教からはアルチェミー・コロビインとミハイル・グレチンが派遣された^{xvi}。」この2名に与えられた役目は重大であり、それ故、クジミンが述べるように、彼らが年代記において高い地位を与えられていたと考えることはそれほど突飛ではない。ただ、史料を見る限り、彼らが「宮廷」を構成し、また軍務を担うような人びとであったかどうかについて、最終的な判断は難しい^{xvii}。

このように、フェオグノスト時代までの俗人勤務人と思しき人々は、はっきりと「宮廷」を形成していたと主張できるまで材料を持ち合わせていない。もちろん、業務の遂行上、少なくとも官房のようなものが府主教座に存在し、そこでの勤務人も存在したと十分に考えられる。また「府主教のもとから」の特定の人物が派遣という状況は、やはり府主教に近い勤務人団のようなものが当時存在したことを想起させる。ただ、今のところ、この時期には神の家である教会において俗人官僚がいた、と述べる程度に留めておきたい。そして彼らは俗人ではあるものの、世俗権力との明確な関係は見いだせないことを指摘しておこう。

2 モスクワ諸公と府主教アレクシー

1) 府主教アレクシーと大公セミョン

上述の通り、既に府主教フェオグノストの晩年にアレクセイ（アレクシー。府主教在位1354-

78年)は次期府主教と見なされており、コンスタンティノープルからの使節が帰還した後、彼自身がコンスタンティノープルへ乗り込み、そこで叙任され、1355年に帰国を果たすことになる^{xxv}。

さて、アレクシー時代において、彼とモスクワ大公ドミトリー・イヴァノヴィチ(後のドンスコイ)との間で緊密な関係が結ばれたことはよく知られている。ただ、この関係は、基本的には、この時期の様々な出来事においてそれが確認される、という状況に基づいて論じられていると言って良い^{xx}。しかし緊密化は単純に結果から分かるばかりではなく、人的関係や制度的な構造からも示唆される。アレクシーはそもそも、府主教になる以前から大公権力と緊密な関係を結んでおり、更に、権力の緊密化を目的として大公権力が彼の任命を欲したとまで述べるができるように思われる。

まずは、アレクシーの出自を確認しておこう。彼は1304年頃にモスクワ・ボヤーレの家門ビャコント家の長男として生まれ、俗名はシメオン、或いはエレウフェリーであった(史料により記述が異なる)^{xx}。父親のフォードル・ビャコントはモスクワ公イヴァン1世カリタの治世(在位1318~41年)に一門を率いてモスクワに勤務替えを行い^{xxi}、その後ボヤーレ、そしてモスクワ代官^{xxii}としてモスクワ貴族のほぼ頂点と言うべき地位を占めた。その長男アレクシーはイヴァン・カリタを洗礼時の代父とすることで^{xxiii}、幼少期から大公権力と関係を有しており、ある程度は将来を囑望されていたと言えるだろう。ただ、彼は早くから修道生活に関心を持ち、モスクワのボゴヤヴレンスキー修道院で剃髪をし、アレクシーの修道名を得て、修道生活に入った^{xxiv}。

ところがアレクシーの修道院入りは、彼と世俗権力との関係の希薄化をもたらさなかったようである。彼自身の意思は判然としないが、イヴァン・カリタの後を継いだセミョン公(在位1341~53年)は少なくとも1344年からアレクシーをフェオグノストの代官に任じ^{xxv}、その結果、アレクシーはボゴヤヴレンスキー修道院を出て、在ウラジーミルの府主教館に入ったと考えられる(府主教フェオグノストはモスクワに滞在した)。教会法上、当時の正式な府主教座はウラジーミルにあったので、アレクシーのウラジーミルへの任命はまさに厚遇と呼ぶべきものであった。もちろんこれには、彼がモスクワ代官の長男であることが影響を及ぼしたであろう。

いずれにせよ、アレクシーは、まさに予定通り、フェオグノストの後継者に指名されることになる。もちろん、指名自体はフェオグノストによるものであるが、これはB・ウスペンスキーが論じるように、セミョン大公の意向が反映されたものと考えてよからう^{xxvi}。まずアレクシーは一旦、1299年以来廃止されていたウラジーミルの主教に任じられた^{xxvii}。そして、フェオグノストの存命中であるにも拘わらず、アレクシーの府主教就任を伺う使節が大公の使節と府主教の使節が一つの使節団を組む形でコンスタンティノープルに派遣された^{xxviii}。こうした願い出は非常に異例のことであった。コンスタンティノープル総主教フィロテオスはこの時の府主教の任命の願い出について、結局はこれを認めることになるのだが、それでも、アレクシーに宛てた書簡では、今回のような形式での任命が例外であることを強調することになった^{xxix}。その後、セミョン大公は使節の帰国を見ぬまま、当時流行したペストにより死去してしまう^{xxx}。彼はその死に臨んで遺言状を書くのだが、家族に対し、府主教アレクシーに従順であるよう遺言を残している。P・Γ・スクルィニコフやB・クリチェフスキーが述べるように^{xxxi}、アレクシーは未だ府主教に任じられておらず、ウラジーミルの主教であったのだが、こうした遺言は、いかにセミョン大公がアレクシーを高く買っていたかを明らかにする^{xxxii}。尚、セミョンを継いだイヴァン2世の遺言状にはこうした指示はない。

こうして総主教より確約を得たアレクシーは、上述のように1353年に自らがコンスタンティノー

ブルに向かい、そこで「キエフと全ルーシの府主教」に任命されることになる。

このように、アレクシーはドミトリー大公との蜜月を過ごす以前から大公権力と密接な関係を結んでいたのである。この事実は、以下の節で見るとおり、アレクシーの出身家門であるビャコントー門について見るときに更に明確になるだろう。

2) 大公ドミトリー・イヴァノヴィチと府主教アレクシー

その後のアレクシーとモスクワ公との協調関係についてはこれまでの研究でもよく知られており、ここで改めて論じるまでもないのだが、象徴的な事例のみ簡単に紹介しておく。とりわけ1359年にモスクワ公に当時9歳のドミトリー・イヴァノヴィチ（後のドンスコイ）が即位した後、まさに摂政として彼を支え、時に研究者により、アレクシーこそがドミトリー幼年期の事実上のモスクワの統治者と言わせしめるほど、緊密な関係が結ばれた^{xxxiii}。その真骨頂とも言えるのが、ウラジーミルの大公位を巡るトヴェリ公及びリトアニアとの戦いでアレクシーがモスクワに与えた援護である。

1368年にはアレクシーは、教会の代表者として、モスクワのライバルであるトヴェリのミハイル公に身の安全を保証した。モスクワ公ドミトリーによるミハイル公のモスクワへの呼び出しに際し、警戒したミハイル公がトヴェリを發とうとしなかったからである。そこで教会の長であるアレクシーが身の安全を保証したのだが、これは奸計であり、ミハイル公はモスクワ到来後に逮捕された。その後、結局トヴェリ公は釈放されたものの、大公と府主教への不信は募り、ミハイル公はリトアニアの娘婿アルギルダス大公のもとに逃亡し、これがリトアニアによる3度のモスクワ侵攻を招くことになる^{xxxiv}。その後アレクシーは、モスクワ防衛のために援軍を送らなかったルーシ諸公、またリトアニア側についた諸公に対する呪詛を行った^{xxxv}。1371年にはハン国に人質となっていたトヴェリ公の息子イヴァンをハン国から買い受け、モスクワの府主教館に閉じ込めた^{xxxvi}。1372年、大公がキプチャク・ハン国に行き（この時もアレクシーが大公をオカ川まで見送った^{xxxvii}）不在であった時は、リトアニア大公アルギルダスとの交渉を進めた^{xxxviii}。

このように、大公と教会のトップである府主教とは緊密な関係、信頼関係を結んでいた。では、アレクシーと大公との人的関係以外の観点から、聖俗両権の関係を見てみよう。

3 聖俗両権力の接合要素としての府主教ボヤーレの発生と諸家門

1) 府主教ボヤーレの発生

史料上、14世紀後半の一時期から「府主教のボヤーレ」と呼ばれる人々が出現する。彼らについて、特に初期には不明な点が多いのだが、基本的には府主教の宮廷を構成する人々の最上位を占めていた。上述の通り、ボヤーレの他には、ドヴォレツキー（宮廷官）、カズナチェイ（財務官）、書記などがおり、大公宮廷の勤務宮廷になぞらえた位階構成を取ったのが特徴である。

上述のように、クジミンは府主教宮廷の成立を更に遡らせたが、彼は俗人官僚の府主教周辺での存在、勤務の活動を挙げているのみで（もちろん、その事実自体は興味深い）、「宮廷」の成立については論じ切れていない。筆者が特に指摘したいのは、まさに「宮廷」の象徴と言える「ボヤーレ」の語が、クジミンが念頭に置くフェオグノスト以前の時代には登場しないことにある。クジミンが述べる通り、府主教に仕える俗人が散見されることは間違いないのだが、そうしたことを「宮廷」の成立と見なしうるかといえば、単純にそうとは言えまい。

府主教ボヤーレは史料上、1378年にアレクシーが死去した後、1379年の大公ドミトリーが推す

府主教候補者ミチャイ（ミハイル）のコンスタンティノーブル行きの際に、その随行者たちの名称として初めて登場する。大公のボヤーレとともに、5名の府主教ボヤーレの名が挙げられている。フォードル・ショーロホフ、イヴァン・アルチェミエヴィチ・コロビン、その兄弟アンドレイ、ネヴェル・バルミン、そしてステパン・イリイン・クロヴィニャである。使節団には他にも府主教座の人員として通訳や下級の勤務人が同行したが、上記の5名だけがボヤーレと呼ばれている^{xxxix}。

この5名はどのような人物であったのか。詳細な情報は史料に殆どない。Φ・ショーロホフについては、子孫と思しき、加えて府主教座勤務をする人々については後代の史料に情報があるものの、本人についての情報は皆無である^{xl}。イヴァンとアンドレイのコロビン兄弟について言えば、彼らは、父称から判断する限り、1353年にアレクシーの任命を願い出るために帝都に向かった使節団の一員であったアルチェミー・コロビンの息子であったと考えられる。前述の通り、父親がボヤーレであったかどうかは判明しないが、府主教勤務が既にこの段階から相続されていたことに鑑みると、府主教ボヤーレの一部は府主教官房の中から生じたと言えるだろう。ネヴェル・バルミンとステパン・クロヴィニャについての情報はない。ただ、前者と同じ姓を持つ者が後代の府主教勤務人に存在していたり、また府主教座の所領が形成されていた地域にこれらの家名に因んだ村が存在していたことだけは指摘しておこう^{xli}。

このように、5名の府主教ボヤーレ各々に関する情報は殆どなく、確認できるのはボヤーレの位階が1379年の段階で存在したことだけである。ただ、彼らが1378年のアレクシーの死後にミチャイ、或いは大公ドミトリーにより急いでボヤーレに任じられ、府主教座で勤務し始めたとか、また同じく、府主教宮廷制度がアレクシーの死後に急いで創られたと考えるべきではない。教会の新たな長を決めることが喫緊の課題であったミチャイにもドミトリー大公にも、宮廷を整備する時間的余裕はなかったと考えられ、また史料上でもそうした動きは確認できない。むしろ、ボヤーレも、また宮廷制度もアレクシーの生前から存在していたと考えるのが自然であろう。

こうした考えは、第一に、1392年の大公ヴァシーリー1世と府主教キプリアン（在位1381-82, 90-1404年）との協約が裏付ける。アレクシーの死後に10年以上続くことになった府主教座の混乱が収束した後に、両者が互いに新大公と新府主教として世俗権力と教会権力との関係を確認・定義したこの文書では、様々な分野について、アレクシー時代のあり方に戻るべきことが確認された。その際、府主教に仕える勤務人たちの軍事勤務についても規定されている。「余、大公が自ら馬で戦いに出る時、府主教のボヤーレと勤務人も〔出発し〕、府主教の軍司令官のもと、大公の旗のもとに入る。府主教アレクシーの時代には勤務しておらず、新たに府主教に〔仕えるよう〕命じられた者は、大公の軍司令官とともに歩み、自分の居住地の軍司令官のもとに入る」とされた^{xlii}。つまり、既にアレクシー時代から府主教ボヤーレが存在したと考えられるのである。また彼らは、クジミンがフェオグノスト以前の府主教役人の例としてあげたような「官僚」ではなく、府主教ボヤーレは、大公軍の一部として、軍務を担う存在であったことも確認しておこう。

第二に、年代記における「ミチャイ伝」に、ミチャイがコンスタンティノーブル行きの前からあたかも府主教であるかのように振る舞った状況の叙述があり、そこでは「府主教ボヤーレが彼に仕えた」とも記されている^{xliii}。つまり、ミチャイの府主教叙任前から、府主教ボヤーレが存在した根拠が存在するのである。

では、いつからボヤーレは存在したのだろうか。その回答には窮せざるを得ない。ただ、少なくとも組織が出来上がったのはアレクシーの登位後であり、フェオグノストの時代に遡ることはないように思われる。

まず、アレクシー時代の国家・教会関係への復帰を目指す上述の協約のなかで、聖堂教会が不当に集めていた税への言及があり、そこでフェオグノスト時代のあり方について言及されているのである。ところが、その一方で、上述のように、軍務のあり方については、アレクシー時代に戻すことだけが言及されているのである^{xiii}。同じ協約文書の項目が、一方でフェオグノストに言及し、他方でアレクシーにのみ言及するという状況は、単なる文言上のミスではなく、意図的に差がつけられたものと考えるべきであろう。つまり、軍務を行うような府主教ボヤーレは、フェオグノストの時代には存在しなかったと考えるべきである。

このように、具体的な年月日は不明であるが、アレクシー時代のある時期から、ボヤーレが出現したと考える根拠がある。

では次に、聖俗両権を接合する家門を具体的に見ていきたい。尚、ヴェセロフスキー及びクジミンの研究がこうした家門については詳細な研究を残しているので、以下ではそれらに依拠しながら聖俗権力がどういった人的関係で接合されていたのかを見ていきたい^{xiv}。

2) ビャコント家

アレクシー時代の聖俗権力の緊密化を考察する場合、彼とその弟たち、そしてその子孫との関係にも触れねばならない。有力家門ビャコント家に属すアレクシーには4人の弟がいた。上から順に、フェオフアン、マトヴェイ、コンスタンチン、そしてアレクサンドル・プレシチェイである。この弟のうち、少なくともフェオフアンとアレクサンドルの二名は父親と同じくモスクワ大公の宮廷でボヤーレとして勤務することになる^{xv}。

フョードル・ビャコントの次男フェオフアン（1393年死去）は、ビャコント家の家系文書によると、イヴァン2世及びドミトリー大公のもとでボヤーレであった。五男のアレクサンドル・プレシチェイもドミトリー大公時代のボヤーレだった。特にアレクサンドルは、大公の寵愛を受けたボヤーレとしてよく知られ、その子孫はプレシチェエフ家として、権勢を謳歌した。いずれにせよ、モスクワ代官フョードルの子のうち、長男は教会の長を務め、次男以下2名が大公ボヤーレとして、大公の宮廷で最上位の位階を同時期に有したのである。残念ながら、この状況がどのような効果を具体的に発揮したのかを明示する史料はないが、大公権力と府主教権力との良好な関係を深める背景であったとは言えるだろう。

またアレクシーの次弟フェオフアンには二人の子がいた。ステパンとダニールである。

弟ダニールは父と同じく大公ボヤーレとしてドミトリー・ドンスコイに仕え、とりわけ外交活動における彼の活躍は著しいものだった^{xvi}。本稿のテーマに関連して、彼について述べておくべきは、大公ヴァシーリー1世、そして府主教キプリアンとの私的な関係である。ヴァシーリーはまだ大公となる以前、父ドミトリーにより遠方の地、キプチャク・ハン国に人質として送られたことがあるのだが、それに付き添っていたのがこのダニールであった。両者は1386年にハン国から逃げ出し、ヤガイロ（ポーランド王にしてリトアニア大公）支配下の地域を迂回してモスクワに向かったのだが、その際に途中から合流し、彼らをモスクワまで連れて行ったのが、当時ドミトリー大公に疎まれてキエフに在住していたキプリアンだった^{xvii}。その数年後、大公ドミトリーと府主教ピーメン（在位1379-80, 82-89年）が相次いで亡くなった時、新大公となったヴァシーリーはキプリアンをキエフからモスクワに呼び戻すことになる。ダニールも引き続き大公ボヤーレとして大公の寵愛を受け続け、異例のことであるが、俗人でありながら、その死に際して、伯父アレクシーの墓のそばに、ウスペンスキー聖堂に葬られたという^{xviii}。

他方で、ダニールの兄ステパンについて言えば、こちらも当初大公のもとで勤務したが、1392年頃に大公ヴァシーリー1世が彼を、府主教に返り咲いた「キプリアンにボヤーレとして与えたⁱ」。つまり、父親の代と同じく、兄弟がそれぞれ大公の宮廷と府主教宮廷にてボヤーレとして勤務をしていたのである。彼らが共同で聖俗関係の調整に従事した具体的な場面は、1390年代の大公ヴァシーリー1世と府主教キプリアンとの所領交換契約（アレクシンとカラシの）である。この時両者は、所領と同時に交換されるボヤーレとして名が挙がっているが、ステパンとダニールの兄弟も当然、交換契約の場に陪席したと考えられる。この協約は、ヴェセロフスキーによると、協約そのものが、大公権力の下で教会を監督するという長期的な意味を持ったⁱⁱ。本稿の筆者は以前、そうした見方を批判したが、とはいえ、この協約が聖俗両権力を緊密な関係のもとに置いたことは疑いない。府主教キプリアンは、直前の時期に続いていた教会内部の混乱の収束のために、大公権に依存した安定を目指していた。こうした協約の締結に、ビャコント家の兄弟が、立場を異にしながらも参加しているのである。

尚、この時には、ビャコント家以外についても、大公のボヤーレが府主教にボヤーレとして譲渡され（上記ステパンの他、ドミトリー・アフィネエフ、アンドレイ・オスレビャチャ、ドミトリー・ライコヴィチ、ミハイル・ライの4名）、逆に数名の府主教ボヤーレが大公のボヤーレになっていることも指摘しておく（上記ダニールのほか5名）。つまり、人的な異動を通じて、両宮廷間で交流がなされているのであるⁱⁱⁱ。

その後のビャコント家についても簡単に述べておこう。ステパンの子孫からは数多くの府主教ボヤーレが出ることになるが、他方で上述の、フォードル・ビャコントの五男アレクサンドル・プレシチェイの系統は多くの大公ボヤーレを輩出することになる。このように、大きな意味でもビャコント家は聖俗権力をつなぐことになったのである。以下、ヴェセロフスキーの研究を参考にしながら、ステパンの子孫（当然、15-16世紀の人物である）と府主教宮廷におけるその身分を列挙しておく。

上記ステパンの息子にはユーリー（1）（便宜上以下では数字を振る）とダニール（2）がいた。前者は1450年代に府主教ヨナ（在位1448-61年）の主馬頭ボヤーレ（ボヤーレ団の中でトップとして承認されるタイトル。常に存在したわけではない）だったⁱⁱⁱ。

ユーリー（1）には二人の子フォードル（1.1）とヴァシーリー（1.2）がいた。前者は府主教フィリップ時代（1464-73年）の府主教宮廷官を務め、その後、府主教ゲロンチー（1473-89年）と府主教ゾシマ時代（在位1490-94年）には府主教ボヤーレだった。後者はゲロンチー、ゾシマ時代に府主教ボヤーレだった^{iv}。

ステファンの子ダニール（2）には二人の息子、フォマ（2.1）とニキータ（2.2）がいた。フォマは府主教ヨナと府主教フェオドシー（在位1461-64年）に仕え、また府主教フィリップとゲロンチー時代には府主教ボヤーレだった。弟ニキータはヨナとゲロンチーに仕えた。ゾシマと府主教シモン（在位1495-1511年）時代には府主教ボヤーレだった^v。

ユーリーの子フォードル（1.1）には息子コンスタンチン・ボグダン（1.1.1）がいた。彼は府主教ヴァルラーム（在位1511-21年）と府主教ダニール時代（在位1522-39年）に府主教ボヤーレだった^{vi}。

ユーリーの子ヴァシーリー（1.2）にはアンドレイ（1.2.1）、セミョン（1.2.2）、フォードル（1.2.3）、イヴァン（1.2.4）、チェスノイ（1.2.5）の5人の息子がいた。アンドレイは1498年に府主教小貴族だった。弟のセミョンはシモンとヴァルラーム時代に府主教ボヤーレだった。フォード

ルは1550年にウラジーミルの代官だった。イヴァンは封地持ち、チェスノイは府主教ヨアサフ（在位1539-42年）、府主教マカーリー時代（在位1542-63年）の府主教ボヤーレだった^{lvii}。

このように、府主教アレクシーの弟フェオファンの子孫たちは府主教宮廷の勤務人を世襲のような形で勤め上げていった。もちろん、大公ボヤーレを輩出するプレシチェイの一門とは、代を経るごとに直接の血縁関係は薄れていく。しかし、ロシアのエリート家門の特徴としての門地制は、少なくとも16世紀半ばにはまだ両家門を一つのまとまりと考えており、その意味で、同じ家門の中に府主教に仕える俗人家門と、大公に仕える一門とが併存していたのである。

3) コロビン家

上述の通り、1354年のコンスタンティノーブルへの使節派遣の際、府主教の主導でアルチェミー・コロビンが派遣され、アレクシーの死後にはその子らイヴァンとアンドレイの兄弟が府主教ボヤーレとして、ミチャイに同行する形でコンスタンティノーブルに派遣された^{lviii}。以後、この家は府主教宮廷の勤務人を輩出することになる^{lix}。

ところが15世紀半ばに一門の一部は大公勤務に移っていく。とりわけ、クジマ・コロビンはヴァシーリー 2 世時代以降、イヴァン 3 世の統治期にかけて地方で大公の郷司を務めた後、1471年には大ノヴゴロドに対するイヴァン 3 世の遠征に大公のボヤーレとして参加し、年代記によると「150名ほどの部隊を率い」るまでになっていたという^{lx}。また同じく一門のピョートル・コロビンも大公のもとで郷司を務めた^{lxi}。

このように、一門の一部が勤務替えを行って聖俗権力間を異動することもあった。これが、コロビン家という一門内に両権力に勤務する者が併存する状況を作り出したのである。

4) アフィネエフ家

1390年代初頭のモスクワ大公ヴァシーリー 1 世と府主教キプリアンとの協約文書において、大公から府主教に「譲渡」されたボヤーレとして、ドミトリー・アフィネエフが登場する^{lxii}。彼の家は、ウラジーミル・スズダリ地方の相続領領主であり、父アフィネイはイヴァン 1 世の時代に大公に土地（ペトロフスコエ村）を売却したという記録が残っている^{lxiii}。

この家に生まれたドミトリーは、上述のように1390年代初頭に府主教ボヤーレになると、93年には府主教キプリアンの依頼を受けてコンスタンティノーブルに派遣された。これは、府主教裁判権を拒絶する大ノヴゴロドを総主教に訴える目的を有していた^{lxiv}。彼はこれをうまくやり遂げ、総主教からの文書を持ち帰った^{lxv}。更に総主教と、ニジニ・ノヴゴロド地方の教会の府主教への従属に関しても話し合った。このように、彼は府主教ボヤーレの身分に相応しい重要案件を担う役割を得ていたのである。

ところが、経緯や理由は判然としないものの、彼はその後、大公のボヤーレとして登場する。この「異動」は、研究者の意見では15世紀最初の10年、恐らくキプリアンが死去した1406年以前に生じたと考えられている。彼は、大公ヴァシーリー 1 世が数通作成した遺言状のうち、最古のもの（1406-07年に作成）に、他の大公ボヤーレと共に遺言の証人として登場しているからである^{lxvi}。彼の署名はユーリー・イヴァノヴィチ・コゼリスキー公、コンスタンチン・ドミトリエヴィチに続き、3 番目である。言うまでもなく、大公の遺言時に証人であるということは、彼の大公宮廷における地位の高さを物語るものであるが、更に 7 人のボヤーレのうちの 3 番目であることもそれを示していると言える。

彼の「異動」の理由は明らかでない。しかしこうした風通しは、教会の内情を大公宮廷に伝えることになったことは疑いなく、その意味では、大公権による教会支配を進める土台となり得たことは述べておく。

5) オスレビャチェフ家

1380年のクリコヴォの野の戦いで、モスクワ大公ドミトリー・イヴァノヴィチ麾下の軍がモンゴルの将軍ママイが率いる軍を破り、いわゆる「タタールのくびき」からのロシアの離脱が進んだ。その際、『ザドンシチナ』等の戦記物語では、アンドレイ・オスレビャチャなる人物の戦場における獅子奮迅の働きが描かれている^{lxxv}。

このアンドレイは、当時、大公ドミトリーに仕えたボヤーレであった。『ザドンシチナ』の原初版（伝来しない）に近い、いわゆる「簡素版」を例外として、その後成立した「拡大版」や『ママイの戦いの物語』などの後代の軍記物では、彼は、トロイツェ・セルギエフ修道院の修道士であり、聖セルギーのもとから派遣されて戦いに加わったと記されている。しかし、戦いの後、比較的早い時期に成立した『ザドンシチナ』の「簡素版」にはアンドレイは登場しない^{lxxvi}。つまり、ある時点で、彼が修道士であると語られ始めたのである。

クジミンが明らかにしたように、実際には、当初、アンドレイは俗人であり、大公ドミトリーに仕えるボヤーレだった^{lxxvii}。彼は元々はオカ川流域のリュブツクのボヤーレであり、十中八九、1360年代末か70年代初頭にリュブツクからモスクワに到来し、大公への勤務を開始した^{lxxviii}。

その後、彼は上述の交換文書において、大公ヴァシーリー1世により、府主教キプリアンに「譲渡」され、府主教ボヤーレとなった^{lxxix}。

彼の息子のうち、2名も両権力の合間でそのキャリアを積んだ。

そのうちの1人、アキンフは父親と同様にそのキャリアを世俗の勤務から始めた。その後、父親とはほぼ同時期、1390年頃に府主教座への勤務に移った。91年には、府主教の代理人として、裁判提出用の証言を集めるためにツアレヴォ・コンスタンチノフスキー修道院の前院長ツァリコのもとに派遣された。またヴァシーリー1世が亡くなった際には、当時の府主教フォーチャー（キプリアンの後継府主教）により、大公位を狙う弟公ユーリー・ドミトロフスキーのもとに、これを制するために派遣されている。

アキンフの兄弟ロジオンは、身分的には修道士であった。しかし彼は半ば世俗権力の使節としての役割を果たした。1398年に、当時、対オスマン帝国で資金不足に陥っていたビザンツ帝国にモスクワ大公は資金を援助した。これをコンスタンティノーブルまで運んだのが、「一介の」修道士ロジオンであった。彼がこうした役目を担った理由は、史料的に直接言及があるわけではないが、父親アンドレイ、そして兄弟アキンフのキャリアを考慮するならば、ロジオンも大公と府主教の双方から信頼された人物であったと考えられよう。

6) ユーリエフ家

少々後の時期になるが、15世紀中頃にも興味深い例がある。

ユーリエフ家は、15世紀の府主教ヨナの主馬頭ボヤーレ、ユーリーに発する家門である^{lxxxii}。このユーリーの息子にイヴァンがいた。元々彼が誰に勤めていたかは明らかでないが、大公ヴァシーリー1世の時代、彼は、父親とは異なり、府主教にではなく大公妃ソフィヤに仕えていた^{lxxxiii}。尚、弟たちは府主教に仕えていた^{lxxxiv}。

その後、ソフィヤは1448年8月に修道女として出家をすることに決めた。それに先立ち、イヴァンは勤務替えを行い、府主教勤務に従事することになった^{lxxv}。「異動」元は大公の宮廷ではないが、世俗の宮廷と府主教宮廷のあいだでイヴァンの「異動」が生じたことは注目に値する。

結びに代えて：府主教ボヤールと大公ボヤールの交換

未だ検討は不十分であるものの、アレクシーのような個人や、或いは府主教ボヤールの家門が家門全体として中世ロシアの聖俗両権力と結びつく場合、また一人の人物が両権力間を「異動」する場合があった。そうした動きや関係を通じて、この時期の聖俗両権は緊密化し、或いは緊密な関係を結ぶための土台を築くことになった。これが、ヴェセロフスキーらが述べるような、大公権力の下に教会が入っていく第一歩と見るべきか、或いはむしろ協調関係の構築と見るべきなのかは、今後の検討課題である。

ただ、この時期については、もう一つ、課題が残っている。これは先行研究で殆ど問題にされていないことなのだが、上述の1390年代の大公ヴァシーリー1世とキプリアンとの所領交換文書に記載される「ボヤールの交換」をどう理解すべきかという問題の解明である。ヴェセロフスキーも含め、全ての研究者は、ステパン・ビャコントのような大公勤務人の、府主教への譲渡にはしばしば言及している。他方で、その逆、ステパンの弟ダニールらの「譲渡」については、全く言及しないのである。その理由は、恐らく、この状況があまりに理解不能であるからだと思われるのだが、しかし史料上ではボヤールを「交換した」とある^{lxxvi}。この交換を現実と見なすならば、ドミトリー・アレクサンドロヴィチ・フセヴォロシのような有力ボヤールも、一時期府主教勤務を行っていたことになってしまうので、恐らく多くの研究者は頭を抱えていると思われるが、この問題は本稿のテーマにとって一考に値するものであり、次の課題としたい。

¹ 拙稿「ヤロスラフ賢公の教会規定-解説と試訳・訳注」『北方人文研究』（北海道大学）第2号、2009年、81-100頁；同「ウラジーミル聖公の教会規定-解説・試訳と注釈」『岐阜聖徳学園大学紀要』51号、2012年、83-103頁；同「14世紀モスクワ社会における公の裁判権と教会裁判権」『中世ロシア研究論文集』（中近世ロシア研究会編）、2014年、57-73頁；同「中世ロシアの府主教裁判法」『岐阜聖徳学園大学紀要』54号、2015年、47-63頁。

² 特に、拙稿「14世紀後半から15世紀初頭のモスクワ大公権力と教会権力-聖俗管轄権の問題を中心に」『ロシア史研究』98号、2016年、3-22頁。

³ Веселовский С. Б. Феодальное землевладение в Северо-Восточной Руси. т. 1. М.-Л., 1947; Кузьмин А. В. На путь в Москву. т. 2, М., 2015. 近年А・В・クジミンは既に13世紀末の段階で俗人の府主教役人が府主教に仕えていたことを論じたが、その彼もある程度確固とした組織としては、府主教フェオグノスト時代、或いは次のアレクシー時代を想定している。Кузьмин, На путь. т. 2, С. 12, 17.

⁴ 後に各種の特権が与えられ、15世紀には身分と化していくが、この時点ではそうした特徴はほぼ見られず、各種特権も特許状を通じて与えられている。

⁵ Веселовский, Феодальное, С. 413-27; Акты феодального землевладения и хозяйства. 1951. Ч. 1. С.3-10; Православная энциклопедия (ПЭ.). т. 6. М., 2003, С. 131-133; Кузьмин, На путь, т. 2, С. 25-39, 40-98.

⁶ Ксанф М., Органы епархального управления в Древней Руси. Православное обозрение 1874-8, С. 167; ПЭ. т. 6, С. 131; Шапов Я. Н. Формирование церковной юрисдикции и проблема правового положения изгоев в Древней Руси // Исторический вестник. 2002. No.

- 1 (16), С. 92; Веселовский, Феодальное, С. 335; Борисов Н. С. Русская церковь. С. 86.
- ^{iv} Кузьмин, На путь, т. 2, С. 12.
- ^v Полное собрание русских летописей (ПСРЛ). т. 25, С. 145. ПСРЛ. т. 24, С. 99と比較せよ。
- ^{ix} Клосс В. М. Избранные труды. т. 2, М., 2001. С. 28.
- ^x Кузьмин, На путь, т. 2, С. 12.
- ^{xi} クジミン自身も сановникиが一般に俗人を指すという論拠を述べると同時に、『ピョートル伝』の事例がそれに当たるかどうか、最終的な判断は保留している。Кузьмин, На путь, т. 2, С. 11-12 и примечание 20.
- ^{xii} Кузьмин, На путь, т. 2, С. 13-14.
- ^{xiii} ПСРЛ. т. 3, М, 2000. С. 99.
- ^{xiv} Кузьмин, На путь, т. 2, С. 14.
- ^{xv} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. М., 2000, Стб. 62.
- ^{xvi} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 62.
- ^{xvii} 以下で見るように、コロビインの子らが後にボヤーレとして登場するが、だからと言って、父親についてもそうだったとは言えまい。否定も出来ないのではあるが。
- ^{xviii} ПСРЛ. т. 25, М.-Л., 1949. С. 180.
- ^{xix} Голубинский Е. Е. История русской церкви. т. 2-1, М., 1900. С. 223; Веселовский, Феодальное, С. 335; Борисов Н. С. Русская церковь. С. 85.
- ^{xx} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 121; ПЭ. т. 1. С. 637; Родословная книга князей и дворян. ч. 1. М., 1787, С. 276; Fennell J. L. A History of the Russian Church to 1448. London, 1995. p. 140.
- ^{xxi} Родословная, С. 276.
- ^{xxii} Веселовский, Феодальное, С. 334
- ^{xxiii} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 121.
- ^{xxiv} Юшко А. А. Феодальное землевладение Московской земли XIV века М., 2002. С. 190.
- ^{xxv} ПЭ. т. 1. С. 638.
- ^{xxvi} Успенский Б. А. Царь и патриарх. М., 1998, С. 382.
- ^{xxvii} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 62.
- ^{xxviii} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 62.
- ^{xxix} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 63; Русская историческая библиотека (РИБ.), т. VI, Приложения, № 9, стб. 44-46.
- ^{xxx} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 62.
- ^{xxxi} Скрынников Р. Г. Святители и власть. С. 20; Кричевский Б. Митрополичья власть в средневековой Руси. СПб., 2003. С. 164-65.
- ^{xxxii} Духовные и договорные грамоты великих и удельных князей XIV-XVI вв.(ДДГ.), М.-Л., 1950, С. 14.
- ^{xxxiii} Веселовский, Феодальное, С. 334.
- ^{xxxiv} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 87-90.
- ^{xxxv} Кричевский, Митрополичья, С. 61; Борисов, Русская, С. 85.
- ^{xxxvi} ПСРЛ. т. 18, С. 111; Кричевский, Митрополичья, С. 195.
- ^{xxxvii} Кучкин. В. А. Договорные грамоты московских князей XIV века. М., 2003. С. 92.
- ^{xxxviii} Кучкин, Договорные, С. 133.
- ^{xxxix} ПСРЛ т. 15, вып. 1. Стб. 129.
- ^{xl} Веселовский, Феодальное, С. 353. 1510-11年頃の土地売買文書に「イヴァンの子フョードル・シェロホフ」が証人として登場する。この文書では、Ф・Бтотулринがモスクワ郡のФрярово村をИ・Челотфなる人物から購入した。これだけでは証人のシェロホフと府主教ボヤーレとは同定できない。ところ

が、1512年になると、この村は府主教の宮廷官フォードル・スルミンによって、「買い戻し権」が行使されて府主教座に買い戻されるのである。そうなると、元々村は府主教の所領であり、その売買に府主教ボヤーレのシェロホフが証人として関与していたという可能性もあるだろう。Акты феодального землевладения и хозяйства XIV-XVI веков (АФЗХ.). т. 1. М., 1951, С. 67-68.

^{xli} АФЗХ. т. 1, No. 254; ПСРЛ. т. 13, С. 468; Акты социально экономической истории Северо-Восточной Руси (АСЭИ.). т. 1. М., 1952. С. 102.

^{xlii} АСЭИ. т. 3. М., 1964. С. 19.

^{xliii} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 125.

^{xliv} АСЭИ. т. 3, С. 19.

^{xlv} Веселовский, Феодальное, С. 413-27; Кузьмин, На путь, т. 2, С. 9-105.

^{xlii} 三男マトヴェイと四男コンスタンチンについては、ボヤーレであったとする言及がない史料があり、研究者によっては彼らをボヤーレとして扱わない。但し両者がエリートに属していたことに変わりはない。

Кричевский, Митрополичья, С. 134; Веселовский С. Б. Исследование по истории класса служилых землевладельцев. М., 1969. С. 247.

^{xliii} ПСРЛ. т. 8, С. 62.

^{xliii} ПСРЛ. т. 15, вып. 1. Стб. 151; ПСРЛ. т. 15, вып. 2. Стб. 441; Кузьмин, На пути, С. 29-30.

^{xliii} ПСРЛ. т. 15. вып. 1. Стб. 438; т. 8. С. 62-63.

ⁱ Родословная, С. 276.

ⁱⁱ Веселовский, Феодальное, С. 418; Скрынников, Крест и корона, М., 2000, С. 103.

ⁱⁱⁱ АФЗХ. т. 1. С. 24.

ⁱⁱⁱ Акты исторические. т. 1, СПб., 1841. С. 98-99.

^{iv} Родословная, С. 276-77; Веселовский, Феодальное, С. 426; Акты, относящиеся до юридического быта древней России (АЮ.), No. 69-I, II, No-156-V.

^{iv} Веселовский, Феодальное, С. 426; АЮ, No. 69-I, II, No-156-V.

^{vi} Родословная, С. 277; Веселовский, Феодальное, С. 426; АЮ, No. 147-IX, X.

^{vi} Веселовский, Феодальное, С. 426; АЮ, No. 147-IX, X.

^{vi} ПСРЛ. т. 15. вып. 1. Стб. 62, 129.

^{ix} コロビン家の系譜については、Кузьмин, На путь, С. 34-38.

^{ix} ПСРЛ. т. 5. вып. 2. М., 2000. С. 181.

^{xi} АСЭИ. т. 3, С. 31; Кузьмин, На путь, С. 34-38.

^{xii} АФЗХ. т. 1. С. 24.

^{xiii} ДДГ. No. 1, С. 10.

^{xiv} РИБ. т. 6. Приложения No. 38.

^{xv} РИБ. т. 6. Приложения No. 41.

^{xvi} ДДГ. No. 20, С. 57.

^{xvi} Библиотека литературы древней Руси. т. 6. СПб., 1999, С. 104-189.

^{xvi} Памятники Кульковского цикла. С. 91; Кузьмин, На путь, С. 53, примечание 227.

^{xix} Кузьмин, На путь, С. 52-53.

^{xx} 時期確定についてはКузьмин, На путь, С. 63-64を見よ。アンドレイの所領と思しきオスレбьячевъ村は1363年以前はモスクワ公の手中になく、また1372年以降にはセルプホフ公領であった。勤務替えの理由としては、クジミンはモスクワの対リトアニア攻勢の結果であると見なす。アンドレイの出身地であるオカ川沿いのリュブツクがリトアニアとの係争地になっており、71年のアルギルダスの書簡でも、この地域から「裏切り者」が大量にモスクワに流れたことが示されている。РИБ. т. 6, Стб. 139-140.

^{xxi} АФЗХ. т. 1, С. 24.

^{xxii} Кузьмин, На путь, С. 92.

^{xxiii} АСЭИ. т. 2, No. 323.

^{lxxiv} АФЗХ. т. 1, No.44, 46, 50-51, 54-55, 64, 69 ; Кузьмин, На путь, С. 93.を見よ。

^{lxxv} Кузьмин, На путь, С. 92-93.

^{lxxvi} АФЗХ. т. 1, С. 24.